

名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科  
平成 27 年度 学位（論文博士）論文要旨

Graduate School of International Studies  
Nagoya University of Foreign Studies  
Thesis or Dissertation

学位論文題目 Title	戦前・戦中におけるタイの日本語普及と日本語教育—バンコクとチェンマイの日本語学校への日本軍の影響— The Spread and Education of the Japanese Language in Thailand Before and During World War II : The Outcome of the Japanese Military Presence in Bangkok and Chiangmai Japanese Language Schools
氏名 Name	山口 雅代 Masayo Yamaguchi
専攻分野 Field of Study	博士（日本語学・日本語教育学） Doctor of Philosophy in Japanese Linguistics/Pedagogy
学位授与の日付 Date	2015 年 6 月 3 日 June, 3, 2015
学位記番号 Diploma Number	乙第 5 号 No. Otsu-5
論文審査委員 Dissertation Committee	廣瀬正宜 教授 尾崎明人 教授 田中真理 教授 田中寛 教授 大東文化大学 Professor Masayoshi Hirose Professor Akito Ozaki Professor Mari Tanaka Professor Hiroshi Tanaka Daito Bunka University

【キーワード】

日本語普及、日本語教育、日タイ文化研究所、バンコク日本語学校、チェンマイ日本語学校

【keywords】

Japanese Spread, Japanese Education, The Institute of Japano-Thai Culture, The Bangkok Japanese Language School, The Chiangmai Japanese Language School

# 論文要旨

本研究は、戦前・戦中におけるタイの日本語普及と日本語教育が、日本軍とどのような関係にあったのかを明らかにすることを目的としている。

序論では、Language Spread（言語普及）の定義を日本語普及に応用し、日本語普及と日本語教育の位置づけを明確にした。日本語普及とは、伝達機能において、日本語または日本語の変種を使うコミュニケーション・ネットワークの比率が、時間の経過とともに増えることであると定義した。位置づけでは、日本語普及の下位に日本語教育が位置することを示した。

第1章の先行研究では、（1）タイの日本語普及に関する日本側の動きについての研究、（2）日タイ間の文化協定・文化交流に関する研究、（3）タイへの働きかけについての研究、この3つの研究からタイの日本語普及と日本語教育について整理した。その結果、タイの日本語普及を主導した外務省文化事業部の文化事業が、1940年12月6日に内閣情報局に移管すると外務省文化事業部が廃止され、それ以降文化事業が文化宣伝の下に置かれ変化があったことが示されていた。しかし、タイに日本軍が駐屯したにも関わらず、日本軍と日本語普及に言及した研究が行われていなかった。さらに、日本軍のビルマへの後方支援最前線のチェンマイにあった日本語学校については場所さえもわかっておらず、チェンマイの日本語教育史の研究は行われていないことがわかった。そこで以下の課題を設定した。

研究課題1：戦前・戦中の日本国内の日本語普及の動きについて

- （1）タイの日本語普及を担った機関は、どのように日本軍と関連したのか。
- （2）南方軍は、どのような日本語普及を担ったのか。

研究課題2：戦前・戦中タイで行われた日本語普及について

- （1）外務省文化事業部から内閣情報局への移管による影響はあったのか。
- （2）日本軍とどのような関連があったのか。

研究課題3：チェンマイの日本語普及について

- （1）チェンマイ日本語学校はいつ設立され、どこにあったのか。
- （2）チェンマイ日本語学校はチェンマイに駐屯した日本軍と関係があったのか。

研究課題1と2は、アジア歴史資料センターなど公的機関の資料や戦前・戦中の体験者の記述を一次資料として、先行研究と共に用いた。研究課題3は、資料が現存しないため、オーラル・ヒストリーによりチェンマイ在住の年配者やチェンマイ日本語学校学習者カチョンクリンの聞き取りを口述資料とした。

研究課題1は、第2章で取り上げた。

日本は、1933年に常任理事国であった国際連盟を脱退すると、国際的な孤立の恐れから

欧米への文化宣伝を目的に、外務省文化事業部に国際文化事業を担う第3課を創設した。初代課長が柳澤健で、文化事業部長が坪上貞二である。1934年4月に国際文化振興会が設立され、4月14日に第1回理事会を開き、所管である外務省文化事業部から坪上貞二と柳澤健が出席し、理事や役員を選出した。1940年12月6日に文化事業が内閣情報局に移管されると対外文化宣伝に力を入れた。欧米との戦争が近づいてくると、文化事業の対象が南方諸地域に限定され、その地域に文化宣伝を行うなど、陸海軍の意向に沿ったものになった。

文部省は1939年6月20日から22日まで第1回国語対策協議会を開催し、その結果1940年12月23日に日語文化協会内に日本語教育振興会が設立された。日本語教育振興会が1941年8月25日に日語文化協会内から文部省内に移されると日本軍の関与が始まった。1941年12月8日に大東亜戦争が始まると、東南アジアでの戦勝により、南方諸地域への統治が問題となり、1942年8月大東亜建設審議会文教部は基本方針を出し、その方針に沿って「南方諸地域日本語普及に関する件」が決定され、陸海軍の要求に基づき日本語普及が行われた。南方諸地域への日本語普及は陸海軍主導で行われた。

研究課題2は、第3章、第4章、第5章で取り上げた。

外務省文化事業部と日語文化学校の松宮一也を中心に1938年12月に日タイ文化研究所バンコク日本語学校が設立され、日語文化学校から星田晋五と高宮太郎が派遣された。しかし、やがてこの二人が内紛により辞めることになった。

バンコク日本語学校立て直しのために、1941年7月に国際学友会から鈴木忍が派遣されると、教材が国際学友会で用いられているものになった。バンコク日本語学校の連携は、日語文化学校から国際学友会に変わっていった。

日本軍との関連に関しては、次の2つあげることができる。まず、一つは大本営が1942年9月29日に「対泰施策に関する件」を打ち出したことである。これは、タイの独立国としての体面を守るが、日本の施策に協力し、タイが大東亜新秩序の一員となるよう指導するというものであった。国際文化振興会は戦争が始まると、戦争を高揚するような写真展や映画上映を行った。もう一つは、在タイ日本大使館付武官田村浩を中心とした、2つの諜報工作である。インド独立工作のための藤原（F）機関とビルマ独立工作のための南機関である。南機関の本部は、英国から接收したボルネオ・カンパニーにおかれていた。田村浩は、星田・高宮の後任として1940年10月にバンコク日本語学校校長に平等通照を着任させた。平等はインド独立を願い、武官優先として日本軍に協力した。バンコク日本語学校の学習者の中には、日本軍の通訳として協力した者や、ビルマ人学習者はビルマ義勇軍としてビルマに向かった者もいた。

1942年10月28日、日本とタイとの間に文化協定が締結されると、1943年3月に日タイ文化会館が創設され、バンコク日本語学校はその傘下となった。日タイ文化会館の館長となった柳澤健は、タイでは日本軍や政治と切り離れた文化事業を行おうとしていた。柳澤が館長となり日タイ文化会館が開館すると、平等はバンコク日本語学校を去った。

研究課題3は、第3章と第6章で取り上げた。

1941年7月にチェンマイ領事館が開館した。1941年12月に日本軍がチェンマイに進出した。チェンマイ領事館の目的は戦争のための情報収集であった。チェンマイ領事館に

は東亜経済調査局附属研究所（通称大川塾）<sup>注）</sup>出身の書記生がいた。チェンマイでもビルマ義勇軍の募集が行われ、南機関が活動していたことが資料からわかった。

チェンマイ日本語学校の学習者であるカチョンクリンの証言から、チェンマイ日本語学校の場所がわかった。チェンマイ日本語学校は、ボルネオ・カンパニーに置かれていた。チェンマイのボルネオ・カンパニーには、年配者の聞き取りにから、資料にない日本軍駐屯地があったことがわかった。バンコクのボルネオ・カンパニーには南機関の本部が置かれていた。このことから、チェンマイのボルネオ・カンパニーにあった日本軍駐屯地も南機関であった可能性が高い。

カチョンクリンの先生は、富田竹二郎であった。富田は、国際学友会とタイ文部省との間に締結された「日泰両国間学生交換協定」による招致学生として1942年9月25日にタイに到着した。カチョンクリンは、1942年に富田から日本語を学んだと証言していた。これらを合わせて考えれば、チェンマイ日本語学校の設立は、早くても富田の到着の1942年中旬以降である。

カチョンクリンは、10代前半に日本兵から教えてもらった歌の意味を知りたいと、チェンマイ領事の紹介によりチェンマイ日本語学校で1年間日本語を学んだ。その後カチョンクリンは、日本軍の通訳となり、ビルマ国境にも出向いた。今もカチョンクリンの中には、70年以上も前に学んだ日本の歌と日本語が忘れず残されていた。

外務省文化事業部主導で設立された日タイ文化研究所であったが、平等が派遣されると諜報工作や日本軍に協力した。バンコク日本語学校学習者の中には、ビルマ義勇軍となる者、日本軍の通訳となった者もいた。チェンマイ日本語学校の学習者も日本軍の通訳となった。チェンマイ領事館もチェンマイ日本語学校も日本軍の転進がなければ、設立されることはなかった。バンコク日本語学校もチェンマイ日本語学校も日本軍の影響はあった。

しかし、バンコク日本語学校の現場では学習者に沿った日本語教育が行われていたことがわかった。それが可能だったのは、組織面でいえば、バンコク日本語学校は、1938年12月から外務省文化事業部第3課と日語文化学校によって設立された日タイ文化研究所の傘下にあったこと、1943年3月から文化協定に基づいて創設された日タイ文化会館の傘下にあったことによる。人材面では、当初は日語文化学校の星田と高宮が担った。1940年10月に武官優先の平等が赴任するが、日本語学校の立て直しのために、1941年7月に国際学友会から鈴木忍が着任し、終戦まで日本語教育を担った。さらに、柳澤健が日タイ文化会館館長となったことも大きい。柳澤は、外務省文化事業部第3課の初代課長として日タイ文化研究所設立にも影響を及ぼした人物である。

戦前・戦中のタイにおける日本語普及は日本軍の関与があった。バンコク日本語学校もチェンマイ日本語学校も日本軍の影響を受けた。しかし、バンコク日本語学校の現場では、学習者に沿った日本語教育が行われていた。

注）大川塾は、東亜経済調査局附属研究所の通称で、大川周明が作った私塾である。東南アジアで働く青年の語学教育を行い、特にタイ語、ヒンズー語、マレー語の教育に力を入れ、それぞれ指定されたアジア各地に派遣され、現地では大使館、商社、軍機関に配属された。（斉藤充功（2006）『陸軍中野学校』平凡社 p.38）